
monochrome **【モノクローム】**

弧月響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

monochrome【モノクローム】

【Nコード】

N5471P

【作者名】

弧月響

【あらすじ】

ある日、町から生き物がすべて消え去りました。

ただし、気味の悪い怪物は徘徊しています。

文章で表せば二行で表現できる、そんな出来の悪いファンタジーのような世界に迷い込んだユイは、そんな無機質の世界で一体何を見つけるのか……。

色々不安はあれど、物語は動き出す。

登場人物に、断わりも無く。

悪夢の終わり、されど未だ夢の途中・01（前書き）

戦闘シーンがある都合上、この小説には当たり前の描写としてですが残虐な描写が登場する機会もあると思われます。が、それらの行為を賛美するものではありません。

悪夢の終わり、されど未だ夢の途中・01

- 世の中には1か0しか存在しない。

父の口癖だった。

世界には1か0しか無く、有か無か、そして唯一か皆無しかない。

だから娘には唯ユイと名づけたのだと。

父の口癖だった。

- 悪夢の終わりはいつも気だるさから始まる。

まるで全力疾走した後のように荒い息を吐きながら、私は息を整えようとする。

嫌な夢だった。

とても、そう、とても、嫌な夢。

水でも飲もうと体を起こす。

まるで鉛でも埋め込まれたかのように重い身体。

無視して、机の上に貼った今日の時間割を確認する。

1時間目は、・・・体育だ。

どうしようか、休んでしまおうか。

なんだか調子が悪いような気がするし。

瞬間、単位の計算を始める、後に今日休んでも問題は無いと判断した。

ちらりと壁に掛けた時計を見る。

そこに表示された時間は『8:12』

そもそも滅茶苦茶寝坊していたらしい。

水でも飲もうかと、部屋を出た。

悪夢の終わり、されど未だ夢の途中・02

台所を見ると家族が誰もいなかった。

まだ皆が出るほど遅くは無いと思うのだけれど。

妹が登校している事や、父親が居ないのも、まあ、早朝に会議があったのかもしれない。

そこまでは分かるが、母親まで居ないのはどういうことだ？

アルバイトの始業時間は10時だった気がする。

机の上にも何も無い。

いつもは母が作っているはずの弁当や家族が食べた朝食の跡も、何の痕跡も残っていない。

食器は洗い桶につけているのだろうか、とシンクを覗いてみるが、シンクには水滴の一滴も落ちていない、これから水を流すことを躊躇わせるほど、きちんと片付いていた。

その癖、ガスレンジに掛けられていたヤカンが空焚き寸前の喘息のような蒸気を吐き出していた。

あわてて火を消す。

ヤカンは安心したように少しづつ、吐き出す蒸気を減らしていく。

私は思わずつぶやいた。

「……、マリーセレスト号事件？」

世界的に有名な、結局中の人間は氷山だったかなんだったかを見て避難しただけ、立ち上るコーヒーマシンの湯気などはためだったという、あの都市伝説を髣髴とさせる気がする。

そんな馬鹿な、と考えながらも少し不安になった私はやはり着替え

て学校に行くことにした。
このキツチンに、どこか拭いきれない不安を感じながらも。

部屋に戻って、ハンガーに掛けている制服を見る。

昨日、クリーニングから戻ってきただけあって皺一つ無い。

私の学校の制服は少し変わっていて、セーラー服のような、そうではないような奇妙な形をしている。

友人に言わせると「某社会現象を引き起こした国民的人気アニメの制服に似てる」らしい。

彼女はそれを知って結構偏差値の高いこの高校を受験したそうである。

なかなか突き抜けたおばかさんだが、いい子である。

・・・本当ですよ？

さて、着替えだした私は、その友人に返すCDの事を考えていたのだが、何かが気になって仕方なかった。

何かがおかしい。

いつもの日常を構成する、とても大事ななにかが欠けてしまっている気がする。

ふむ。

私は顎に指を添えて考える。

この癖のせいで一時期私のあだ名はシャーロックだった。

ちなみに名付けたのは前述した友人である。

彼女がシャーロックと呼ぶたびに『じゃあお前はワトソン君か』と私が突っ込み、

彼女が『うっん、アタシはアイリーン・アドラーよん』と返すのが
クラスの名物だった時期があった。

実に馬鹿馬鹿しい、良い思い出である。

そのせいで2、3下位彼女と喧嘩したりしたけれど。

・・・話を戻そう。

しかし何が欠落しているというのか。

「・・・くしゅんっ！」

静かな部屋に私のくしゃみが響き渡った。

うっかり着替えかけで考えていたものだから体が冷えてしまったよ
うだ。

手早く着替えながら、ほと、気づいた。

欠落しているもの。

手が、止まった。

次いで、呼吸すらも。

ドク、ドクン、心臓がやかましく鼓動を響かせる。

この部屋からは音というものが欠落していた。

いいや、この部屋だけではない。

この家は、このマンションは駅の目の前に存在しているのだ。

それも、朝には快速特急も止まる、通勤ラッシュが中々すさまじい、

えき、が。

恐る恐る、窓から駅を臨む。
ホームは・・・無人だった。
人が、居ない。
無人もいいところだ。

そんな私の目の前で、ゆつくりと、電車が動き出す。
中は空っぽのまま。

そんなのあり得るはずが無い。
まだ8時半だ、いつもならホームには人が、溢れてるはずなのに！

やっと、事態が飲み込めた。
この、異常事態が。

この部屋で欠けていたもの。
それは生活音だ。
人間、いや生物はすべて。
生きていく際には音を出す。
呼吸、食事、運動、その全ては音を発する。

「・・・あ、う、ああああ」

恐怖で、思考が回らなくなる。
がたがたと、足が震え始めた。
きびすを返して、家を出た。
生きている何かを、探すために。

悪夢の終わり、されど未だ夢の途中・03

私は、走った。

いつも寄るコンビニ、学校帰りに立ち寄る本屋、スーパーマーケット。

誰かに何があったのか説明してほしかった。
まったく意味が分からなかった。

何故、こんなに走っても誰ともすれ違わないのか。
何故、一台も車が走っていないのか。

私は、走り回った。

ビルの間、交差点、駅の改札。

人っ子一人居なかった。

物、モノ、もの。

無機物しかなかった。

何処もかしこも、灰色の無機物しかなかった。

其処には私の居場所は無かった。

どこにも、無かった。

そして私は歩き始めた。
きつと酷い格好をしているのだろうな、襟が曲がっていたり、髪も梳かしてない。

・・・いいか、学校に行くわけじゃなし。
誰も私を、見ていない。

学校！

こうなったら最後の当てだ。
あの広大な敷地なら、誰か居るかもしれない。
私は再び走り出した。

校門から靴箱まで走り抜ける。
いまさらながら靴は履いていなかった。
習慣的に上履きに履き替えて、廊下を駆け抜ける。
1年生の教室、2年、3年、・・・実習室！
駆け抜けた。
でも人つ子一人いやしなかった。
水槽の金魚まで、居なくなっている。
何も居ない水槽の中で、機械だけが仕事をしていて、ブクブクと泡を吐き出していた。

とぼとぼと、再び歩き出す。

職員室の前だった。

公衆電話を見つけた。

・・・まさか！

赤いボタンを押し込み、しばらく待つ。

響いたのは、話中のコール音。

十分待っても駄目だったので、電話を切った。

上履きのまま、町をさ迷い歩いた。

人の声が聞こえる！

喜んで扉を開けると販売促進用に録音されたカセットテープが鳴り

響く無人の店内。

なんとなくとめて、また歩き出す。

どこへ行けば良い。

ついさつき見つけた唯一の手がかりは無意味だった。

やがて、私は地元の大形スーパーマーケットに辿り着いた。

この町はさほど栄えては居ないけれど、それでもここのような大型の施設くらいは2、3箇所存在している。吸い寄せられるように、私は中に入った。

中からは初夏だがすでに暑い日も少なくないためか、冷房の風が吹き、ひやりと私の髪を揺らした。右手に曲がる。

食料品売り場だ。

視認したとたん、ぐう、とお腹が鳴った。

現金なものである。

ふらり、と足を向けた。

何か、この場で食べられる加工食品があればなあ。

そう考えていたそのとき。

.....にやあ。

鳴き声が、聞こえた。

「.....、ね、」
「..?」

悪夢の終わり、されど未だ夢の途中・04

柔らかい、鳴き声。

不意に、涙ぐみなくなるほどの、孤独と緩和が私の心に訪れた。

朝起きて、今までの探索で唯一見つけたイキモノ。

彼（彼女）が、ひよっとしたら唯一の仲間なのかもしれない。
そんな錯覚を覚えるほど、私は疲弊していた。

肉体的だけではない、精神的な、疲弊だ。

「・・・こんにち、は？」

ゆっくりと、その場に屈みこんだ。

怯えて、逃げないでほしい。

そう考えながら、ゆっくりと手を伸ばす。

猫は、逃げなかった。

にゃあ、とまた柔らかく鳴いたその猫は、
気品すら感じられるほど、
ゆったりと、悠然とこちらに
歩み寄ってきた。

喉を鳴らしながら、ゆるりと頭を垂れる。

そのまま、動かなくなった。

触っても、良いということだろうか？

恐る恐る、手を頭に載せる。

ふわり、と上質な毛皮が私の手を撫った。

猫は未だ、ごろごろと喉を鳴らしている。

ゆっくりと、手を動かした。

(柔らかい・・・すごく、良い毛並み・・・！)

元は飼い猫だったのだろうか？

いや、定期的にシャンプーしてお手入れしたってことはいかなない。
この猫の持つ元からの資質に違いない。

逃げないと分かった私は、少し大胆に手を動かし始める。

まずは頭、耳を少し、頬、喉元。

猫は大層気持ちがよさそうに私に身を預けてきた。

しかし抱き上げようとすると、素早く身を翻す。

さり気なく、ではあるけれど。

どうやら抱き上げるのは禁句タブーであるらしい。

しばらくそうして猫の手触りを堪能した私は、ゆっくりと立ち上がった。

「あの、さ」

視線を合わせて話しかける。

「なんか、食べ物でも見に行こうよ」

そう、実は猫と戯れている間にも私の胃は空腹を訴えくう、きゆる、と鳴いていたのだ。

しかし猫は意味が分からない、というように首をかしげる。

「・・・、お腹、空いてない？」

そう言い直して見ると、猫は心得た、とばかりに（人の言葉を理解

しているとしても言うのだろうか？（立ち上がり、無人で動きつつけているエスカレーターに飛び乗った。

「ちよ、ま・・・！」

あわてて追いかけると猫は私が見失うか見失わないかギリギリの位置を走り抜けていった。

着いた先は3階、こども服とおもちゃのコーナーやキッズランド、書店、ゲームセンターなどの揃うフロアである。

確かに此処にはペットショップもあるから猫のエサはあるかもしれないけれど。

と、見回してみると猫が居ない。

つい先ほどまで其処に居たと思うのだけど。

「おい、猫ちゃん、猫やーい」

それほど広いフロアでもない。

きよるきよると見渡していると、・・・居た。

なにやら書店の前で座っている。

その目の前にある陳列棚には。

「・・・？」

見慣れない本が混じっていた。

ハードカバーではあるのだが、いやに古びていて、おまけにデカイ。どこぞのライトノベルのキャラが振り回しているアレ並みのサイズだ。

アレとは違い、皮のベルトは付いていなかったが。

猫はその本に興味があるらしい。

一生懸命にその棚に手を伸ばしている。

「それはキミが食べられるものじゃないよ、」

私は笑って、その本に手を伸ばした。

指が触れた、その瞬間。

『………、力には、責任が付随する』

声が、聞こえた。

「は？」

ばさ、本を取り落とす。

案外軽いらしい。

中のページが開いて、あるページで止まる。

なんだか凄く派手な装飾がちらちらと沢山付いていた。

鎖であるとか。紅玉ルビーであるとか、金銀細工で作られた豪華な獣の顔であるとか。

なんかコレ、物凄くアレに似てるんですけど。

あの、苦労カード……、違う、クrouカードとかいうカードを集めるアニメの、集めたカードを

入れておくあの本に。

「……まさか、まさかね。
だって無いよ、ありえないって！無理無理無理！これ信じるほど私
幼くないったら！
だってやばいじゃない！こんな高2にもなって空とか飛ぶ系統のお
話信じてたらただの痛い子じゃん！！」

2次元と現実が違う。
そんなのとつくの昔に知ってる。

現実には助けしてくれる王子様も空飛ぶ筈も、人の良い魔法使いも無
い。
それを知った上で私は、小説や漫画を楽しむべきなんだって、分か
ってる。
でも。

「……、でも、」

もしあつたら、楽しいに違いない。
幽霊も四次元ポケットも、魔法の本だって。
信じていたほうが、楽しいじゃない。

「……、」

本を、再び持ち上げる。
開かれたページの字は読めない。
パラパラと捲っていくと、あるページにカードが挟まれていた。
こちらは裏らしい。
手を伸ばすと、またも。
声。

『カードを手取るならば、進むは嶮しき暗黒に包まれた旅の道。恐ろしき目にも、または束の間の栄光にも見えるだろう。しかしカードに手を伸ばさないという未来もある。』

その場合、訪れるは永遠の孤独と安寧。

絶望に満ちた幸せを噛み締める。

いかようにするも自由である。

だが最後に一つ。

過ぎたる力はその身に不幸を纏わせる。

一度得た力には責任が付き纏う。

力と責任は表裏一体のものである。

この場でカードを、力を手に取らぬという選択は、恥ではないとだけ知るが良い。』

なんか物凄く厨二臭い事を言ってくる本だったらしい。

よくは分からないけど、つまりカードを手に入れたら、なんか力が貰えるってことで。

でも力を使うと責任問題が発生するってこと？

責任、責任かあ。

日本人はこの言葉がもつとも嫌いだって、なんかの本で読んだっけ。でも当たり前じゃないか。

何かをしたら責任を取るの、・・・当たり前だよな。

うん。分かった。

責任、取るから力を頂戴。

私は再びカードに手を伸ばす。

『・・・忠告は、したぞ。』

そう言うと、カードは再び(?)黙ってしまった。

・・・だつてさ。

どうせなら、力はある方が、いいよね。

よく分からないけど。

手に取ったカードを裏返す。

そこには荷物を背負う旅人の凝った絵と数字、そしてこう書かれていた。

【01・愚者^{ぐしや} The Fool】

と。

手に取った次の瞬間、光が溢れてきた、とかそういうわけではなかったけれど。

私はその場で倒れ、気絶していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5471p/>

monochrome【モノクローム】

2011年10月8日12時51分発行